

6月2日(土)、関西慶應寮和会 第13回定例懇談会は、京都市J R丹波口駅(嵯峨野線)からスタートしました。当日は梅雨前の雲一つない青空で強い日差しでしたが、細い路地の日陰で暑さも苦でなく、絶好の散策日和でした。

<参加者> 敬称略 (14名:部分参加も含む)

高橋 周 (S47経)	松尾 哲雄 (S47経)	三角 竜二 (S49工)
西村 元秀 (S53商)	山代 和也 (S55法)	松谷 修 (S60理)
阪本 光宏 (S61商)	山岸 秀聡 (S61経)	竹崎 誉 (H02法)
井内 達彦 (H04商)	浄住 徹朗 (H05経)	渡邊 正勝 (H06理)
兵藤 公治 (H10理)	宮崎 博 (H16経)	

I 第13回定例懇談会

テーマ:「幕末・明治150年 京都のキセキ」

今年は明治元年から数えて150年の節目の年。近代化をもたらした明治維新から学ぶために、幕末から明治にかけての京都の軌跡を辿った。

【第1部】島原散策

最初に、京都S K Y観光協会のガイドさんに先導されて、島原について説明を受けた。

島原は東西南北約200メートル四方の土地で、名前の由来はそれまでの土地から慌ただしく移転を命じられた様子が、その直前に起きた「島原の乱」を連想させたという説もあるらしい。ちなみに島原という町名地番などは無い。島原は遊郭ではなく花街であり、花街とは歌や舞を伴う文化的で楽しい宴の場所とのこと。(写真1)

また島原は塀や堀で囲み逃げられないような街にはなっておらず、自由に往来できたので、吉原が江戸時代を含む360年間に数十回放火にあったのに対して、島原では無かった。しかし市の中心部と離れた場所にあったので、次第にさびれてしまい、昭和の終わりには花街としての役割を終えたとのことである。

説明を聞きながら歩いていくと、歌や舞を提供する花街にとって重要な施設であった歌舞練場の跡地まで来たが、そこには老人向けの新しい施設が立っており時代の移ろいを感じた。(写真2)

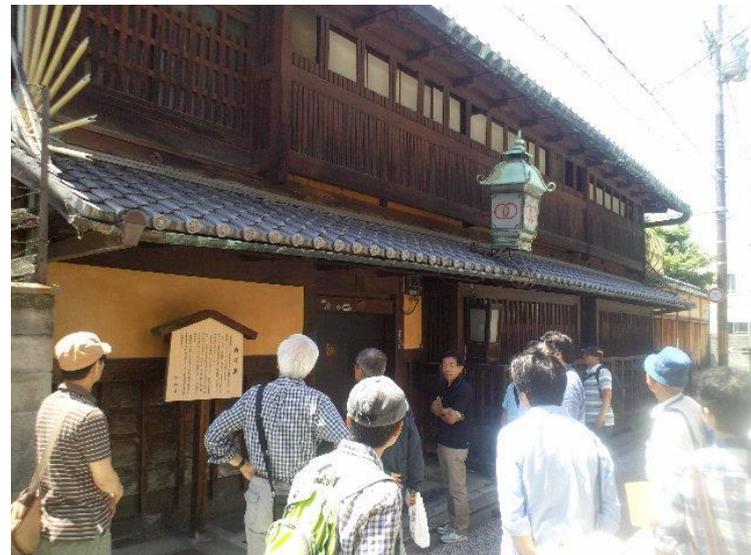


写真1. 島原の花街を歩く



写真2. 歌舞練場の跡地

島原の街をさらに進むと、現在唯一お茶屋として営業している輪違屋を外から見物したあと、当時は揚屋（現在の料亭）であった角屋が資料館になっており入館した。大きな台所を通り大座敷の「松の間」に行き、資料館の説明員の方に話を聞いた。（写真3）

揚屋の名前の由来は2階を主たる座敷にしていたためとのこと。また、茶室があることや大正時代に火災にあったために建て替えた話を聞いた。「網代の間」では珍しい赤い土壁を見物した。赤い壁は花街を表すのではなく、お寺の客間に使用された高級な壁であり角屋の格を高くみせたとのこと。このような角屋を幕末の志士や新選組も利用し、角屋はまさに幕末の渦中にあったのである。

その後、壬生（みぶ）寺まで歩みを進めた。壬生寺には多くのお地藏さんを集めた塔と年3回の狂言そして新選組で有名である。その壬生寺を出てすぐに八木家がある。八木家は新選組が約2年間宿舎として使用した建物でその間に芹沢鴨が暗殺された場所である。

そこで生々しい暗殺の様子を聞き、柱に残る刀傷を目の当たりにすることが出来た。話を聞いた後、抹茶とまんじゅうを美味しくいただき休憩、芹沢鴨像の隣にある近藤勇像の前で全員で写真に収まった。（写真4）

（芹沢鴨：新撰組初代筆頭局長 文久3年（1863年）に暗殺）

【第2部】二条城/京都鉄道博物館 2班に分かれて見学

1班は徳川慶喜が1867年に大政奉還を表明し、江戸幕府の終焉を迎えた「二条城」を見学、2班は日本で最初に電気鉄道（路面電車）を走らせ今日の京都の発展の礎となった鉄道事業を紹介する「京都鉄道博物館」を見学した。

※後日、6月9日の日経プラス1なんでもランキングのテーマ「明治維新150年 歴史学が旅へ」において、二条城は第1位と掲載された。京都鉄道博物館も、同誌の昨年6月4日「歴史パークで時間旅行 弥生から昭和まで体験充実」で7位となっている。



写真3. 揚屋で集合



写真4. 近藤勇の像前にて

【第3部】懇親会

懇親会は皆が再び京都駅近くの「龍馬 軍鶏農場」に集まり行われた。参加者は13名で松尾会長が幕末150年と慶應の始まりのエピソードを紹介し乾杯となった。初参加の松谷氏、久しぶりに参加して頂いた山岸氏の挨拶もあり和やかに進んだ。

最後に若き血を全員で熱唱、名残惜しく散会となった。
(写真5、6)

(記者：宮崎 博)



写真5. 西村OBのE-ルで若き血を熱唱



写真6. 懇親会 京の夜も更けて

II 歴史の向こう側 会津若松城を訪れて

松永修

今年のゴールデンウィークに妻実家の帰省の道すがら、会津若松市に立ち寄り、会津若松城と飯盛山（会津白虎隊の自刃の地）を訪れた。（写真7、8） 会津若松城には「戊申百五十周年」ののぼりが上がっており、場内では企画展が開催されていた。その中で、会津藩は旧幕府に対する忠誠心が強く、天皇が居住の京都を守ろうとしたが、そのために結果的に薩長を中心とした新政府軍に落城され、その上に最果ての土地に飛ばされ悲惨な目にあったことが、綿々と訴えられていた。特に、新政府樹立に関しては、「クーデターによる新政府成立」とまで強い言葉で言っている。

<会津若松市 戊申戦争150周年>

http://www.gurutto-aizu.com/detail/flyerdetail_556.html

多くの日本人にとっては「明治維新150周年」であったとしても、会津人にとっては、今でも「戊申百五十周年」であるという。このことから歴史には必ず表と裏が有り、一面から見ただけでは本当の姿が見えないと痛感した。

東日本大震災の発生後、関西地区で推し進めていた救済活動では、福島県担当は京都府であった。その時の京都側の声として、「京都が五十年前の福島への借りを返すのは今だ」との声が聞こえてきたのは、京都と福島の故郷を持つ私にとり、大変うれしかったのを覚えている。

III 編集後記

今回の定例懇談会は、私は私事で出席できませんでしたが、宮崎記者の文面から楽しいひと時であったことが伺えます。<歴史の向こう側>で述べましたが、新聞を編集しただけでも新たな気付きが得られたことも収穫であったように思います。

11月の定例懇談会は、アンケート結果をもとに場所を決め皆様にご連絡をいたしますので、友人の方とお誘いあわせの上、ご出席をお願いします。皆様にお会いすることを楽しみにしています。 以上



写真7. 会津若松城



写真8. 飯盛山から会津若松を臨む